

「ダークマスター」は、3月7日から4日間、富山市オーバードホールにて上映された。私は、この舞台を見ている間、舞台に飲み込まれていくのを感じた。

物語の2人中心人物のうちの1人である「若者」は、東京を飛び出し、あてもない自分探しをする28歳。彼は成り行きで料理人になるのだが、観客は彼に起こる出来事を、自分の事のように体感することが出来る。振りではなく実際に行われる調理、「マスター」の指示を「若者」と全く同じ状況下で聞くことが出来る客席のイヤホン、観客をまるごと「ダークマスター」の世界に飲み込ませる意味深な音響、照明、映像。これらにより、観客は劇に夢中になるのみならず、「若者」自信になったかのような錯覚に陥るのである。もう1人の中心人物である「マスター」は、再開発が予定されている富山のとある寂れた商店街に定食屋を構える料理人である。彼は、店にふらりとやってきた若者に対し、「俺の代わりにこの店で料理人になれ、指示は出す。」と若者に超小型イヤホンを無理矢理装着させる。彼の出番はそこまで。彼がその後舞台に放つのは、イヤホン越しの声のみである。しかし、彼がマイクに吹き込む声は「若者」の行動に大きな影響を与えていく。彼は舞台上を支配する「マスター」なのである。

個性的な登場人物や演出が多数登場する「ダークマスター」だが、一人一人の登場人物の個性が強烈であるにも関わらず、気持ち悪い「違和感」が全くない。どの登場人物も、この舞台に居るべくして存在しているように感じられるのである。

これは脚本が優れているのもあるが、「ダークマスター」のほぼ全てが富山の人間によってつくられたからでは無いだろうか。役者やセットなど演劇を上映するのに必要な要素を、同じ富山県人どうしで作成したことにより、統一感がうまれたのだ。それだけではない。今回の劇はオーバードホールでの上演だが、観客は最大2200席をほこる広大な客室ではなく、舞台の上に設置された、こぢんまりとした客席で劇を観賞する。これによって、観客自体にも統一感がうまれたのではないだろうか。

若者、統一感、そして劇のみならず舞台全てを支配し操作する「マスター」。

この演劇はタニノ演劇、そして富山のひとつの到達点ではないだろうか。

S. M (富山県富山市)